

二〇一七年六月二十五日 主日礼拝説教要旨

## 「弟」をプロフィールする

(ルカ一五・一一～二四)

共著者になった本、略して『焚き火』本がFBやらブログやらで一寸したブームになっているようだ。まあSNSなどでも発信力のある十二人の応答者を立てているのだから、少々マツチポンプ、自作自演の感がしないでもないが、まあ慶賀の至りではある。さてこの本、正式な書名が『焚き火を囲んで聴く神の物語・対話篇』とあるように、その底層に流れる概念は「神の物語」、そして「物語としての聖書」である。聖書中には様々なジャンルがあるが、その多くが物語記述である。しかし近代合理主義の勃興は聖書物語の中にある心に響く豊かさを蒸留し、結果聖書は「するな」「せよ」のルールブックのように扱われてしまった。そうした反省を踏まえ、イエスが紡ぎ、ルカが収めた放蕩息子の物語を三回に渡りじっくり読み進めていきたい。今朝はその初回として弟息子のプロフィールングを試みたい。

### 一、自己中心

このたとえは唐突に始まる。登場人物

についての説明の後、弟はいきなり「お父さん、私に財産の分け前を下さい」と生前贈与を求める。現代日本ではシニア世代が資産全体の六割を保有しているという現状もあつてだろう、国会では若い世代へ資産が移転されるような法改正も行われて一定の効果を上げているようだが、二〇〇〇年前のユダヤでは生前贈与はポピュラーなものではなかった。第一送るほうではなく、受ける側が「財産の分け前」を願うというはある意味非常に失礼な行為である。またこういった考え方は非常に自己中心的だ。更に彼は得た財産を浪費する。彼にはどういう気持ちで父親が財を成したのかを考える殊勝さはどこにもない。「俺のものは俺のもの。好きに使って何が悪い」とばかりに放蕩に明け暮れ、ついに全財産を使い果たしてしまつたのである。

### 二、無関心

弟のこの一連の行動の背後には何があつたのだろうか。ひよつとしたら彼は父を憎んでいたのだろうか。確定的なことは言えないが話者の意図はそうではないと考えるとよいだろう。というのも本文中で弟はなんと二度も「お父さん」と呼びかけているのだ。それは兄が「あなたに任せ(二九節原文直訳)」と言つているのとは好対照で

ある。しかしだからと言つて弟が父を愛していたというのは早計だ。「愛の反対語は無関心」の典拠がマザーテレサであるかどうかはともかく、弟には父の気持ちを忖度してあげるような配慮はなかった。それは先に述べた生前贈与のリクエストや財産すべてを金に換えて旅立つたこと(一三節・新共同訳)に明らかである。彼は悲しいまでに自己中心的であり、自己愛の犠牲者であり、それが彼を破滅へと追いつたのだ。

### 三、功利的

こうして弟は故郷を離れ、遠い国に行き遊びに遊んだ。最初は人も集まり、取り巻きもできてちやほやされたが、みるみるうちに財産は減り、人は離れ、ついに誰もいなくなつた。金の切れ目が縁の切れ目。実にステロタイプな落ちぶれようである。そこまで落ちてようやく弟息子は我に返る。そのとき彼が語つた言葉には確かに彼の悔い改めが見える。彼ははつきりと自らの罪を認めている。だがその背後にはある種の計算が働いているのを見逃すべきではない。父に対する謝罪の下の句には「子」であることを自ら放棄し「雇人」に身を落とすことをもって生き抜こうという作戦があるのだ。「生きるためなら子の身分を捨ててもいい。奴隷としてならば家にお

いてくれる。そうすれば喰える」そう考えると弟が練習した謝罪文の中にはたかな取引がある。しかし父の愛の前には小賢しい取引は不必要だつた。というのも父にとつてはどんなに自己中心で、人の痛みが分からず、なお功利的な男になろうとも、息子は息子であり、それ以外の何者でもなかつたからである(二二節)。

\* \* \*

「このハゲーツ「ちがうだろー」恐ろしい金切り声に心が凍り付いた。いわゆる女子御三家から赤門をくぐり、厚生省(現・厚労省)入省後には国費留学生としてアイビーリーグのトップスクールの大学院に学んだという才媛が恐るべきパワハラを繰り返していたのだ。しかしなぜ彼女はこんな怒つていたのである。その謎を解く鍵は「これ以上わたしの評判を下げるな」にある。むき出しの自己中心性が人を人とも思わない無関心さへと駆り立てているのだ。選挙区や国会では笑顔を振りまき、「評判」を得ようと躍起になつていた彼女の姿を見ると私たちはこの問題を対岸の火事にしていけないことは明白である。友よ、功利主義におぼれ、自己を肥大化させる道は破滅への一本道だ。今私たちに必要なのはまず我に返り、父の神の待つ、愛の家に帰ることである。